以植物爲紋

〔太平記二十五〕藤井寺合戰事

京勢由斷シテ、或ハ物具ヲ解テ休息シ、或ハ馬鞍ヲオロシテ休メル處ニ、譽田八幡宮ノ後ロナル山陰ニ、菊水の旗一流ホノ見エテ、ヒタ甲ノ兵七百餘騎、閑々ト馬ヲ歩マセテ、打寄セタリ、スハヤ敵ノ寄タルハ、馬ニ鞍オケ、物具セヨトヒシメキ色メク處ヘ、正行眞前ニ進デ喚テ懸入ル、

〔牛馬問二〕橘諸兄公、官職を辭し、山城の國井手の里に致仕し給ひ、此玉川のやまぶきを殊に愛し給ひ、此景色を直衣に繡し、常に附著有しとなり、其後胤是をもて家の紋と定め、水に山ぶきをかかせける、子孫の人、山ぶきを菊とおもひけるや、いつとなく菊水となせり、是河陽侯正成の先祖也、

〔安齋隨筆後編六〕一楠家の紋　楠が家の紋は、菊花三ッありて、傍下に流水の形あり、永正七年、立雪齋が畫し見聞諸家紋と云書に見たり、或說に、楠は井手左大臣諸兄公の末孫也、彼公井出の里に住玉ひ、井手の玉川岸の山吹を愛し玉ひしゆゑ、山吹の花の川水に流るゝ形を、楠家の紋に付たるなり、菊の花にはあらずと云へり、此由來さもあるべきがごとくなれども、出所不詳、右諸家紋には菊花なり、太平記にも、楠が旗を菊水の旗と記したり、太平記は、楠正成正行などが存生の時の人の書し物なれば、山吹を菊とは書違へまじき事なり、山吹と云は、理を好む人の附會ならん、

〔諸家系圖纂二十紀〕菅谷紀氏（中略）家紋、龜甲之內根菊、旗紋祖之一字書、

〔寛永諸家系圖傳六十五〕江川

家紋、菊井、

〔見聞諸家紋〕源姓　八幡太郎　童名不動丸、或源太、從四位下陸奥守、號金迦羅殿、鎭守府將軍、後冷泉院依勅、父頼義隨兵、奥州之安倍貞任誅、其弟宗任爲降人、攻戰間九ヶ年、其後藤武衡家衡與、攻戰